

錢謙益における杜甫「秋興八首」の受容と展開

——「連章組詩」の視點——

長谷部 剛

(一) 前言

(二) 箋注の内容

(三) 「秋興八首」の受容過程

(四) 錢謙益の連章組詩

(五) 結語

(一) 前言

杜詩の注釋史を考える場合、清朝初期の錢謙益と朱鶴齡との「注杜の争い」を無視することはできない。錢と朱は共同で杜詩箋注を刊行する豫定であったが、のちに兩者の意見が對立したためにそれぞれに自分の杜詩箋注を刊行することになった、というのが「注杜の争い」の経緯である。そし

て、錢謙益との對立を経験した朱鶴齡は「與李太史□□論杜注書」なる文章⁽¹⁾を著す。これは錢謙益の杜詩箋注に詳細な反駁を試みる文章である。そのなかに次のような一節がある。

況又累牘不休、有專注「秋興八首」、至衍成卷帙者。此何異唐人解「曰若稽古」四字、乃作數萬餘言。

これは、錢謙益の杜甫「秋興八首」への箋注が膨大な量にのぼることを、『尚書』堯典への唐人の注釋と關連させて批判するものである。しかし、この記述によって、錢が「秋興八首」に箋注を施すことに並々ならぬ情熱を傾けていた事實自體は、かえって客觀的に理解されよう。

本稿は、錢謙益の「秋興八首」への箋注について、その内

容と成立過程を検討することによって、錢において「秋興八首」がどのように受容され展開されたかを考察するものである。

(二) 箋注の内容

錢謙益（明、萬曆十年（一五八二）～清、康熙三年（一六六四））箋注の『杜工部集』二十卷（通稱『錢注杜詩』⁽²⁾）は、錢謙益最晩年の著作である。しかし、錢の杜詩箋注の作業は、「讀杜小箋」「讀杜二箋」（『牧齋初學集』卷一百六～一百十所收）に始まっている。兩書は、明、崇禎六年（一六三三）からその翌年にかけての作であり、しかも、錢謙益の杜詩箋注（以下、「錢箋」と略記）の最大の特徴、すなわち、「杜甫が皇帝批判をも意圖していた」との錢の指摘⁽³⁾は、すでにこの兩書中に見ることができる。つまり、兩書是最晩年に成立した『錢注杜詩』の原型と言うべきものである。具體的に言えば、錢謙益が『錢注杜詩』の自序において新解釋を示し得たと自負する、杜甫の「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」「洗兵馬」「承聞河北諸道節度入朝歡喜口號絕句十二首」「諸將五首」の諸篇については、若干の修正や増補を加えられながらも、「讀杜小箋」「讀杜二箋」の主旨がそのまま『錢注杜詩』に踏

襲されている。

しかし、「秋興八首」への箋注については、その傾向とは異なる様相を見せる。最晩年の『錢注杜詩』（卷十五）の箋注を、三十年前の「讀杜小箋」のそれと比較すると、以下の二点が指摘できる。

- ① 量的には、二倍以上に増えている。
- ② 内容的には、かつての箋注を「舊箋」と稱してその誤りを自ら明記するなど、かなりの修正が施されている。

つまり、錢謙益は明代に杜甫の「秋興八首」詩について一應の解釋を示した後も、稿を改めて詳細な箋注作業を續けていたのである。そもそも、『錢注杜詩』全體においては、錢が杜詩に箋注を施している箇所は決して多くない⁽⁴⁾。したがって、この「秋興八首」に、ほとんど例外的なかたちで、膨大かつ詳細な箋注が施されていること自體に、錢の關心の所在を見出すことができるのである。また、改稿という事實も、「秋興八首」への錢の強い執着を明らかにするものであろう。そして、『錢注杜詩』書中の「秋興八首」の錢箋において最

中國詩文論叢 第十五集

も特徴的なのが、「秋興八首」を八首からなる連章組詩と見なし、その構成に注意して讀むべきであることを錢が主張している點である。この主張は詩題注に詳細に述べられている。

〈詩題〉「秋興」：

殷仲文詩云、「獨有清秋日、能使高興盡」。潘岳「秋興賦」序云、「於時秋也、遂以名篇。」

箋曰、此詩、舊箋影畧、未悉其篇章次第、鈎鎖開闔。

今要而言之。「玉露凋傷」一章、「秋興」之發端也。江開塞上、狀其悲壯、「叢菊」「孤舟」、寫其淒緊。末二句、結上生下、故即以「夔府孤城」次之。絕塞高城、杪秋薄暮、俄看落日、俄見南斗、爐煙燼而哀猿號、急杵斷而悲笳發、「蘿月」「蘆花」、淒清滿眼、蕭辰・遙夜、攢簇一時。「請看」二字緊映「每依南斗」、即連上「城高」「暮砧」當句呼應耳。夜夜如此、朝朝亦然、日日如此、信宿亦然、心抱南斗京華之思、身與漁人・燕子爲侶、遠則匡衡・劉向之不如、近則同學輕肥之相笑。

第三章正申「秋興」名篇之意。古人所謂文之心也。然「每依北斗望京華」一句、是第三章中吃緊關節。蕭條歲晚、身事如此、長安棋局、世事如此、企望京華、平居寂寞、

故曰「百年世事不勝悲」也。次下乃重章以申之。「蓬萊宮闕」一章、思全盛日之長安也。「瞿唐峽口」一章、思陷沒後之長安也。「昆明池水」一章、思自古帝王之長安也。「昆吾御宿」一章、思承平昔遊之長安也。由瞿唐鳥道之區、指曲江禁近之地、兵塵秋氣、萬里連延、首章即云「塞上風雲接地陰」也。唐時遊幸、莫盛於曲江、故悲陷沒則先舉曲江。漢朝形勝、莫壯於昆明、故追隆古則特舉昆明。曰「漢時」、曰「武帝」、正尅指自古帝王也。此章蓋感嘆遺蹟、企想其妍麗、而自傷遠不得見、乃疊申曲江、末句文勢了然、今以爲概指喪亂則迂矣。天寶之禍、干戈滿地、營壘俱在國西、及郭令收西京、陳於香積寺北、澧水之東、皆漢上林苑地、在昆吾御宿之閒、然城南故地、風景無恙、故曰「自逶迤」也。「碧梧」「紅豆」、秋色依然、「拾翠」「同舟」、春遊如昨、追綵筆於壯盛、感星象於至尊、豈非神遊化入、夢迴帝所、低垂吟望、至是而「秋興」云能事畢矣。

此詩一事疊爲八章、章雖有八、重重鈎攝、有無量樓閣門在、今人都理會不到、但少分理會、便恐隨逐穿穴、如鼷鼠入牛角中耳。餘義則更於分章下詳之。

冒頭に「此詩、舊箋影畧、未悉其篇章次第、鈎鎖開闔。」とある通り、「舊箋」、すなわち「讀杜小箋」では、「秋興八首」を全首收録して個々の詩句に箋注を施すものの、組詩としての構成には一切觸れない。つまり、錢謙益は晩年になって、組詩としての「秋興八首」への理解を深めたことがわかる。さらに、「秋興八首」各首の箋注においても組詩としての構成と脈絡について言及する。

〈其二〉：

又曰、「每依南斗望京華」、皎然所謂截斷衆流句也。孤城砧斷、日薄虞淵、萬里孤臣、翹首京國、雖復八表昏黃、絕塞慘澹、唯此望闕寸心、與南斗共芒色耳。此句爲八首之綱骨。章重文疊、不出于此。

〈其四〉：

又曰、肅宗收京已後、委任中人、中外多故。公不以移官僻遠、愁置君國之憂、故有「聞道長安」之章。「每依南斗望京華」、情見于此。

〈其五〉：

又曰、……「西望瑤池」以下、開寶之長安也。「王侯

錢謙益における杜甫「秋興八首」の受容と展開（長谷部）

第宅」以下、肅宗之長安也。徘徊感嘆、亦所謂重章而共述也。

〈其七〉：

又曰、……今謂「昆明」一章。緊承上章「秦中自古帝王州」一句而申言之。……於上章末句、翹指其來脉、則此中絃致、襍疊環鎖、了然分明。

〈其八〉：

又曰、箋以爲思昔遊之長安、是也。今更指昔遊之地。謂亦連躡上章而來。……「秦州自古帝王州」一句、亦總結於此。蓋事訖而重申、亦章重而事別矣。公詩如駭鷄之屎、四面皆見。故錯綜牙舉、以告知者。

錢謙益の解釋によれば、「秋興」の主題は、其二「每依南斗望京華」の句にある。夔州（Ⅱ「南斗」）にあって長安（Ⅱ「京華」）に思いをはせる、というのが全八首の基調である。つまり、「秋興八首」は、「夔州」「長安」と、空間的に二層の構造を持っていることを錢謙益は明らかにする。

さらに、其六「秦中自古帝王州」の句において「秋興」の

意は盡くされた、と錢は言う。換言すれば、この句に杜甫の長安（地方Ⅱ「秦中」）への思いが凝縮している、ということになる。「秋興八首」は其一から其六まで、夔州での現況、朝臣としての過去、唐朝を荒廢させた戦亂、全盛期の長安と現狀、等を詠い、現在と過去が交錯する。そして、其七では漢代の長安を描寫するが、それは其六の「秦中自古帝王州」を敷衍したものである、と錢箋は指摘する。このことによつて「秋興八首」は、國土が荒廢し自身も落魄した現在と、唐朝の最盛期であつた過去、そして、漢代の長安という、時間的に三層の構造を持つことが明らかに⁽⁸⁾なる。

「秋興八首」は、空間的にも時間的にも重層性を持つ構造——錢はそれを何重にも鍵のかかった重い樓閣（重重鉤攝、有無量樓閣門在）に喩える——、そのなかにさまざまなことを敘述する。しかし、詩題注で「此詩一事疊爲八章」と言うように、一つの主題が私たちを變えながらも繰り返されていくことを、錢謙益は指摘する。

（三）「秋興八首」の受容過程

錢謙益の「秋興八首」解釋について考察する際に重要な點は、一宋代以來の杜詩注釋史・受容史において、連章組詩と

しての「秋興八首」の構成に言及するのは、錢謙益が杜詩箋注をなした明末清初に始まる⁽⁹⁾、という事實である。管見のかぎりでは、王嗣奭（明、嘉靖四十五年（一五六六）〜清、順治五年（一六四八）の『杜臆』と、金人瑞（字は聖嘆、明、萬曆三十六年（一六〇八）〜清、順治十八年（一六六六一）の『聖嘆選批杜詩』、そして錢謙益の『錢注杜詩』において初めて、組詩としての「秋興八首」の構成が體系的に詳述される。杜甫の各詩について一首全體の構成を分析したものは明代にすでに多く見られる⁽¹⁰⁾。しかし、數首からなる組詩の構成を論じたものは、明末清初の錢謙益たちに始まる⁽¹¹⁾。

そして、「秋興八首」を組詩として全體的に理解すべきだ、とする主張が明末清初の錢謙益たちによって唱えられた、その理由の一つとして、明代に「秋興八首」について極めて恣意的・主觀的な解釋が行われたことへの反動を擧げることができる。

たとえば、高棅編の『唐詩正聲』や李攀龍編（？）の『唐詩選』は、「秋興八首」を摘錄するのみである。鍾惺・譚元春編の『唐詩歸』に至っては、其七のみを採って次のように言う。

「秋興」偶然八首耳、非必於八也。今人詩擬「秋興」已非矣、況舍其所爲「秋興」而專取盈於八首乎。胸中有八首、便無復「秋興」矣。杜至處不在「秋興」、「秋興」至處亦非以八首也。今取此一首、餘七首不錄……⁽¹³⁾

『唐詩正聲』『唐詩選』『唐詩歸』は、いずれも刊行された當時においては大いに流行した唐詩の選本である。したがって、明代には「秋興八首」を八首からなる連章組詩として全體的に理解しようとする傾向は希薄であったと考えられる。

このような傾向に錢謙益は不満を抱いていた。そして、この態度は明代にすでに形成されていたと考えられる。錢の明代の書簡「答唐訓導汝謬論文書」に、次のようにある。

公安袁小修嘗歎息曰、「少陵『秋興』、元・白『長恨』諸篇、皆千秋絕調、彼何人斯、奮筆簡汰。此輩無心、所以眯目。」賢哉小修、其所見去人遠矣。⁽¹⁴⁾

錢が文中に引く一文は、鍾惺・譚元春ら竟陵派の編になる『唐詩歸』が杜甫「秋興八首」をただ一首を採るだけで、しかも元稹の「連昌宮詞」や白居易の「長恨歌」など定評のあ

錢謙益における杜甫「秋興八首」の受容と展開（長谷部）

る名篇を採録しないこと、その點を非難した袁中道（字は小修）の言葉である。錢謙益は青年期、公安派「三袁」の末弟、袁中道と親しく交流し文學的影響を受けている。⁽¹⁵⁾したがって、この袁の言葉はそのまま錢自身の態度と見なして差し支えなからう。また、明代の「讀杜小箋」が「秋興八首」全首を收録するという事實も、この錢謙益の態度を傍證的に説明している。

（四） 錢謙益の連章組詩

杜甫の「秋興八首」は、「詠懷古跡五首」「諸將五首」などとともに、七言律詩八首からなる連章組詩として分類される。この様式は杜甫が創造したものであり、同一の詩題のもとに七言律詩が數首收められ、それぞれの詩が内容的に緊密に關係し合い、全體としては有機的な一體感を持つ。

そして、ここで注目すべきは、錢謙益もこの七言律詩の組詩を多産したということである。現存する錢の主要な詩集中に七律は一千六十七首あるが、そのうち連章の組詩は一百八十組、計七百九十五首にのぼる。⁽¹⁷⁾たとえば、「吳門送福清公還閩八首」（『牧齋初學集』卷一）は、明、萬曆四十二年（一六一四）、錢謙益三十三歳の時の作で、現存する錢の詩のなか

で最も初期のものである。そして、「病榻消寒雜詠四十六首」⁽¹⁸⁾『牧齋有學集』卷十四は、清、康熙二年（一六六三）冬から翌年元日にかけての作で、その五ヶ月後に錢は八十三歳で没する。このように、錢謙益は生涯の詩作を通じて七律の組詩を多數作り續けていたのである。つまり、錢謙益という詩人にとって、七言律詩の組詩は自己の文學的創作に最も合致した様式であつたと考えられる。

以下、錢謙益の代表的な七律の連章組詩を擧げてその特徴を考察する。

・「冬至後京江舟中感懷八首」(『初學集』卷二十)

明、崇禎十四年（一六四二）冬至、黃山に遊び常熟に歸る途中、京口（現在の江蘇省鎮江市）より發した船中にて作られた。錢謙益六十歳。東林黨の中心人物として重望を擔いながらも政治的には挫折を重ねた後の、家居の時期であつた。この時、李自成をはじめとする内亂、清軍の侵畧など、明朝は内患外憂のために滅亡に瀕していた。

其一是船中で無爲に日々を送る錢謙益自身の姿を詠い、其二では志を得ることのない自己の心情を吐露する。其三で

は、自己を寄る邊無く漂流する船に喩え、今までの處世の失敗を悔やむ。其四は錢もかつて參畫した朝政について議論を展開し、其五では東林黨の一員として明朝皇帝より排斥された経験が述べられる。今、其六の全詩を掲げる。

項城師潰哭無衣 項城師潰えて無衣を哭す

聞道松山尙被圍 聞道く松山 尙ほ圍まると

原野蕭條郵騎少 原野 蕭條として 郵騎少なく

廟堂鎮靜羽書稀 廟堂 鎮靜として 羽書稀なり

擁兵大將朱提在 擁兵の大將 朱提在り

免胄文臣白骨歸 免胄の文臣 白骨にて歸る

却喜京江波浪偃 却つて喜ぶ 京江の波浪の偃^やらかなるを

蒜山北畔看斜暉 蒜山の北畔 斜暉を見る

首聯は明軍の戦況が不利であることを客觀的に描寫する。前句は、この年の九月に陝西總督傅宗龍率いる官軍が項城（現在の河南省項城縣南）で李自成軍に大敗し、傅も賊軍に捕らわれ殺されたことを言い、後句は、七月に明將洪承疇の率いる大軍が清軍との交戦によって壊滅し、殘軍が松山堡

(現在の遼寧省錦州市南)に籠城したことを言う。頤聯においては、このような危急存亡の秋にありながら、朝廷が有効な策を何ら講じないことを諷譏する。頤聯の「朱提」は「朱提銀」のことであるから、この句は腐敗した軍臣を批判した表現であろうか。そして、尾聯では、暗澹たる情に耐えられず、目下航行する長江の波が穏やかなことに強いて喜びを見出そうとする。

其七は、船が金山の近くを行くことから、宋代、この地で金軍の南渡を阻止した將軍、韓世忠を詠う。其八は、冬至を経て春が到来することを豫感してこの組詩を結ぶ。しかし、第二句「錯憂蚊響又成雷」が、晩唐の韓偓の七律「冬至夜作」の「却憂蚊響又成雷」を踏まえることから、明朝滅亡への危惧を讀みとることができる。なぜならば、韓偓の「冬至夜作」は、唐、天復二年(九〇二)、朱全忠の長安侵入によって昭宗が鳳翔に避難し、それに隨行した時に作られた詩⁽¹⁹⁾だからである。

船中での自己を描寫することから始まり、不遇の現在と政治的挫折を重ねた過去に觸れ、朝政について議論し、國家の危機的狀況に言及する。そして、叙述は長江を航行する船にもどり、異民族侵入に對する防衛の歴史を懷古し、明朝滅亡

錢謙益における杜甫「秋興八首」の受容と展開(長谷部)

への危惧を滲ませながら春の到来を豫感して、この組詩は終わる。「冬至後京江舟中感懷八首」は、内容・構成の兩面において有機的な統一性を見出すことができる。

・「西湖雜感 有序」(『牧齋有學集』卷三)

清、順治七年(一六五〇)五月に作られた七言律詩二十首からなる連章組詩。それに先だって錢謙益は黃宗羲の要請に應え、清將馬進寶の駐留する金華(現在の浙江省金華市)に赴き、馬に抗清復明に協力するよう説得した。⁽²⁰⁾ 本詩はその歸路、杭州西湖に立ち寄っての作。時に錢謙益六十九歳。まず、其一を掲げる。

版蕩淒涼忍再聞

版蕩淒涼として再び聞くに忍びん

や

烟轡如緒水如焚

烟轡 緒の如く 水 焚くが如し

白沙堤下唐時草

白沙堤下 唐時の草

鄂國墳邊宋代雲

鄂國墳邊 宋代の雲

樹上黃鸝今作友

樹上の黃鸝 今友と作る

枝頭杜宇昔爲君

枝頭の杜宇 昔 君爲り

中國詩文論叢 第十五集

昆明劫後鐘聲在

依戀湖山報夕曛 湖山に依戀して夕曛を報ず

清軍の蹂躪によって江南の地は荒廢した。首聯はそれへの悲しみを詠う。前句の「版（＝板）」「蕩」はともに『詩經』大雅の篇名。本詩では「版蕩」で動亂の世をそしめる詩の意。後句の「烟巒如赭」は、『史記』秦始皇本紀の「於是始皇大怒、使刑徒三千人皆伐湖山樹、赭其山。」を踏まえる。頸聯の「杜宇」は、蜀の望帝杜宇が死後ホトトギスに化した傳説に基づいて、滅びた明朝の皇帝を指すものと考えられる。尾聯の「昆明劫後」は次のような説話に據る。漢の武帝が昆明湖を造らせた時、地中より黒い灰が見つかった。後に西域の高僧に諮ると、高僧はかつて世界が劫火によって亡びた時の灰であると答えた。⁽²¹⁾ 本詩では明朝の滅亡を暗示する。

其二では、明代の杭州の繁榮を追憶して、それが崩壊したことを悲嘆する。其六は、異民族に徹底抗戦した明初の忠臣、于謙の杭州の祠を明代に参拜したことを回想し、錢自身は當時すでに後金（のちの清）の勃興に不吉な兆候を見出していたことに言及する。其八は、錢謙益の愛妾、柳如是の西湖昔遊を回顧する。其十は、西湖の孤山に隱棲した宋の林逋

の高雅な生活を詠い、動亂の世である現在に絶望する。其十五では、清軍の野蠻さを隱微な表現で諷刺する。其十六は、詠史詩のかたちで南京と杭州を比較するが、現在の荒廢についてとはともに同じだと悲しむ。其十八では、宋の南渡、南宋の滅亡の歴史に明朝顛覆のそれを重ね合わせる。

「西湖雜感」は杭州西湖を機軸とし、多様にして複雑な典故の運用を通じて、實に多くの歴史的事實や人物について懷古し、かつまた、錢謙益自身の過去も回想される。さらに、かつての美しい西湖と現在の荒廢についても對比的に叙述する。しかし、さまざまなことを述べ連ねながらも、この二十首の連章組詩には「明朝滅亡への悲しみ」という主題が貫かれている。錢謙益の清代の作品が收められる『牧齋有學集』には、亡國を経験した悲しみと前朝への思慕の情を詠う詩歌が頻見し、それが錢謙益晩年の最大の文學的特徴となっているが、「西湖雜感」はその典型的な作品と位置づけることができる。

前述したように、錢箋は杜甫「秋興八首」について、「さまざまなことが述べられているが、一つの主題が形を變えながらも繰り返されている。」と分析した。この分析は自作の組詩にも當てはまることが指摘できよう。

また、錢謙益は最晩年の作として杜甫「秋興八首」の次韻詩をのこしており、全十三疊、一百四首という大規模なものである。⁽²²⁾ 順治十六年（南明、永曆十三年へ一六五九）、鄭成功の南京攻畧の舉に感奮して作った「金陵秋興八首次草堂韻」に始まるこの次韻詩の連作は、第二疊以降「後秋興」と題し、結果的には復明運動の終息の過程（鄭軍の敗退と鄭の死去、明の亡命政權の崩壊など）をなぞるように作られ、清、康熙二年（一六六三）の第十三疊に終わる。「後秋興」と總稱されるこの作品の存在から、錢にとって杜甫「秋興八首」がいかに重要な位置を占めていたかを窺うことができる。

以上、錢謙益の七律の連章組詩について、明代と清代の諸作を通観するかたちでその特徴を具體的に検討してきたが、本節の最後に、兩者の相違点について言及しておきたい。

明代の組詩、すなわち『牧齋初學集』所收の作品には、現在進行するその當時の政治状況のなかで自己の感慨や主張を述べたものが多い。例として、

- ・「吳門送福清公還閩八首」（『牧齋初學集』卷一）
- ・「天啓乙丑五月奉詔削籍南歸、自路河登舟、兩月方達京口、塗中銜恩感事雜然成詠凡得十首」（同卷三）

錢謙益における杜甫「秋興八首」の受容と展開（長谷部）

- ・「戊辰七月應召赴闕車中懷十首」（同卷六）
 - ・「十一月初六日召對文華殿、旋奉嚴旨革職待罪、感恩述事凡二十首」（同卷六）
 - ・「獄中雜詩三十首」（同卷十二）
 - ・「和高中丞平仲乘城記事詩八首 有序」（同卷二十）
 - ・「冬至後京口舟中感懷八首」（同卷二十）
- などが挙げられる。
- それに對して、『牧齋有學集』『投筆集』所收の清代の作品には、現在進行する政治的、社會的状況を叙述したものと、

- ・「和東坡西臺詩韻六首 并序」（『有學集』卷一）
- ・「後秋興一百四首」（『投筆集』）

などがある。しかし、過去を回想し、明朝の滅亡を悲しむ作品が壓倒的に多い。例えば、

- ・「再次茂之他字韻」（『有學集』卷一）
- ・「見盛集陶次他字韻詩重和五首」（同卷一）
- ・「己丑歲暮讌集連宵、於是豪客遠來、樂府駢集、縱飲失

日、追憶忘老、卽事感懷、慨然有作凡四首」(同卷二)

・「西湖雜感 有序」(同卷三)

・「東歸漫錄六首」(同卷三)

・「冬夜假我堂文宴詩 有序」(同卷五)

・「贈侯商丘若孩四首」(同卷六)

・「己亥正月十二日過子晉湖南草堂、追憶昔遊、感而有贈四首」(同卷十)

・「病榻消寒雜詠四十六首」(同卷十四)

などを擧げることができよう。

(五) 結語

安史の亂のただなかに生きた杜甫は、唐室の權威の失墜と國土の荒廢を目の當たりにし、そして、自身も經世濟民の志を抱きつつ漂泊の旅を續ける、という一生を餘儀なくされた。この體驗が杜甫の詩歌創作の方向性を決定したことについて言をまたない。そして、後世、歸屬する國家の崩壞・滅亡を経験した詩人のなかには、宋の陳與義、文天祥、金の元好問など、自己と同種の経験を杜甫に見いだし、その視點から杜詩を意識的に祖述しようとする者が少なくない。もし

て、錢謙益は、基本的に、明末清初におけるもっとも熱心な杜詩祖述者として、位置づけることができよう。

「秋興八首」への膨大な箋注と、自作の七律の連章組詩とを、關連的に分析することによって、われわれは、錢謙益の祖述のあり方が、自身の體驗を杜甫に假託するという理念的理解とともに、詩的表現の構造や様式スタイルへの深い理解にも基づくものであったことを、知ることができよう。

錢謙益は、明代からすでに杜甫「秋興八首」を八首全體として解釋する態度を持ち、また、自身の詩歌創作においても、七言律詩を幾首も連ねることによって、そこにさまざまな内容を盛り込みつつ全體的にはある繋がりを持たせる、という表現方法を身につけていた。

しかし、こうした態度や方法は、清代に入って、さらに意識的に深化されたと考えられる。「秋興八首」への膨大かつ詳細な箋注と、「西湖雜感」を始めとした、亡國の悲しみを主要テーマとする七律の連章組詩の存在は、明らかにそれを證明するであらう。

同一の詩題のもとに幾首もの詩を繋げる連章組詩、とりわけ七律のそれは、その様式自體に漸層的な構造性を見いだすことができる。そして、この様式としての漸層的構造のなか

に空間的かつ時間的な重層性を織り込んだのが、ほかならぬ杜甫「秋興八首」である。錢謙益は、箋注を施すことによってその重層性を發見し、確認した。

錢謙益は、また、明朝の滅亡を経験することによって、「現状を嘆き、過去を回想する」という詩歌創作上の明確な主題を獲得した。これは、「現在―過去」と時間的な二層性を持ち、詩歌の主題としては最も典型的・傳統的なものである。しかも、心情的には連綿としてやむことがない。錢謙益は、この主題を表現するのに最も有効な様式を、連章組詩としての「秋興八首」に見いだしたのではなからうか。

「秋興八首」への「錢箋」は、錢謙益の詩人としての資質と、當時の社會的状況とを不可缺とした獨自な注釋であった。錢は、箋注によって自己の史觀や詩論を語るだけでなく、その内在化・血肉化の證しとして、自らの七律連章を生み出したのである。

〔注〕

- (1) 朱鶴齡『愚菴小集』（清人別集叢刊、上海古籍出版社、一九七九）卷十。

- (2) 上海古籍出版社、一九七九年排印本。

錢謙益における杜甫「秋興八首」の受容と展開（長谷部）

- (3) 長谷部剛「杜詩箋注における錢謙益の著述態度―杜甫と錢謙益とを結ぶもの―」（『中國詩文論叢』第十四集、一九九五年）参照。

- (4) 「草堂詩箋元本序」（『錢注杜詩』所收）。

- (5) たとえば、

〈詩題注〉：此詩舊箋影畧、未悉其篇章次第、鈎鎖開闔。今要而言之……。

〈其一〉：……舊箋指樊川故里之菊、非也。

〈其六〉：……舊箋謂并指吐蕃陷長安、非也。

〈其七〉：……舊箋謂借漢武以喻玄宗、指武皇開邊爲證。玄宗雖興兵南詔、未嘗如武帝穿昆明以習戰。安得「旌旗在眼」之語。「兵車行」、前・後「出塞」、諷諫窮兵者多矣。安用於此中度辭致譏、豈主文譎諫之義乎。

〈其八〉：箋（ママ）以爲思昔遊之長安、是也。今更指昔遊之地。

- (6) 『錢注杜詩』に收められる千四百二十四首（他者の唱和詩を含み、逸詩を除く）のうち、詩末で「箋曰、……」と錢謙益が自説を開陳するのは五十餘箇所に過ぎず、一字の注釋もない詩は五百四十八首にのぼる（許永璋「取雅去俗 推腐致新―畧評『錢注杜詩』」、『草堂』一九八二年第二期）の調査による）。

- (7) 『錢注杜詩』卷十五「秋興八首」其二の本文は「每依南斗望京華」に作る。

中國詩文論叢 第十五集

- (8) 程千帆・張宏生「晚年：回憶和反省——讀杜甫在夔州的長篇排律和聯章詩札記」（程千帆・莫砺鋒・張宏生「被開拓的詩世界」所收，上海古籍出版社，一九九〇）は、夔州時期の杜甫の長篇排律と連章詩の諸篇が、時間的に三層の構造——現在・近い過去・遠い過去——を持っていることを指摘する。

私見では、錢謙益が最も早い時期に、（其六「秦中自古帝王州」の句を機軸とした）この三層構造に言及した注家であると考ええる。

- (9) 主として葉嘉瑩『杜甫《秋興八首》集說』（上海古籍出版社，一九八八年增輯再版）を参考とした。また、『杜臆』については上海古籍出版社の一九八三年排印本に、『聖嘆選批杜詩』については成都古籍書店の一九八三年複印本（書名『金聖嘆選批杜詩』）にそれぞれ據った。

なお、金聖嘆の杜詩解釋については、加藤國安「金聖嘆の杜詩評論とその杜詩學史上における意義」（科研報告書『中國古典文學中における人間觀・世界觀の展開とその特質』一九九〇年三月）に詳しい論考がある。

- (10) 孫琴安『唐七律精評』（上海社會科學院出版社，一九九〇）の自序と杜甫の部参照。

- (11) 劉知漸・熊篤「如何理解杜甫的『詩律』」（『草堂』一九八三年第一期）に「清人除了講每首詩的章法而外，同時也講組詩的章法，對『秋興八首』，講得最多。」とあるのが、本稿にとって示唆的である。

- (12) 『唐詩正聲』は卷十六に其一・二・五・七を録し、『唐詩選』は卷五に其一・三・五・七を録す。

- (13) 鍾惺の評語（卷二十二）。

- (14) 『牧齋初學集』卷七十九（上海古籍出版社，一九八五年排印本）。同じ記述が、錢謙益『列朝詩集小傳』丁集中「袁儀制中道」（上海古籍出版社，一九八三年重印本）にも見える。

- (15) 錢謙益と袁中道との交流については、青木正兒『清代文學評論史』第一章「清初の反擬古運動」一「錢謙益」（『青木正兒全集』第一卷所收，春秋社，一九六九）参照。

- (16) 程千帆・張宏生「七言律詩的政治內涵——從杜甫到李商隱・韓偓」（『被開拓的詩世界』所收）参照。

また、「組詩」としての「詠懷古跡五首」について詳しく論じたものに、松原朗「杜甫『詠懷古跡』詩考——古跡の意味するものについて」（『人文科學年報』〈專修大學〉第二十一輯，一九九二）がある。

- (17) 注(16)所掲論文の調査に據る。同論文は「錢謙益詩據『四部叢刊』本『牧齋初學集』・『牧齋有學集』和宣統二年風雨樓刻本『投筆集』統計，後二種或有互相重複者，則豫以刪除。」と注記する。

なお、同論文は、政治的な内容を持つ七言律詩は杜甫によって開拓されたとの認識に基づき、それを繼承した詩人として唐代の李商隱・韓偓を挙げる。そして、政治的内容を持つ七言律詩の連章組詩については、元好問、錢謙益、吳偉業の

三詩人がその繼承・發展者であると指摘する。

- (18) この組詩については、孫之梅『病榻消寒雜詠』與『投筆集』—兼論錢謙益七律詩在題材上的開拓(『求是學刊』一九九三年第六期〈總第九六期〉)に詳しい論考がある。

- (19) 『全唐詩』卷六八〇に載せる「冬至夜作」には、自注として「天復二年壬辰、隨駕在鳳翔府。」とある。

- (20) 錢謙益は、明の亡命政權、弘光朝の高官でありながら清朝に降って官職まで授かったが、その後、抗清復明の運動に深く關係する。この事實については、陳寅恪『柳如是別傳』全三卷(上海古籍出版社、一九八〇)に詳しい。

- (21) 『初學記』卷七「地部」下「昆明池」四に引く曹毗『志怪』。

- (22) 『投筆集』所收。なお「後秋興」については以下の論考を参照されたい。

・鍾來因「杜甫『秋興』與錢謙益『後秋興』之比較研究」(『草堂』一九八四年第二期〈總第八期〉)

・孫之梅「『投筆集』的結構藝術」(『山東大學學報』一九八九年第六期)

錢謙益における杜甫「秋興八首」の受容と展開(長谷部)